

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1985
9





えんどう

メアリー・ジョー・ウェステンヘイバー

たわわに実ったえんどうの
 さやに眠る豆たちよ その
 内に秘めたエネルギーの何と偉大なことか
 いつの日か大地に落ちて
 堅い皮を破り
 光の源に向かって伸びていく

人生の重荷にやつれた君の
 心に眠る神の血筋 その
 内に秘めたエネルギーの何と偉大なことか
 いつの日か眠りから覚めて
 堅い皮を破り
 光の源に向かって帰っていく

聖徒の道

1985年9月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：スベンサー・W・キンボール、マリオン・G・ロムニー、ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会：エズラ・タフト・ベンソン、ハワード・W・ハンター、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・バラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ボット

聖徒の道 1985年9月号第29巻第8号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

International Magazines PBMA061AJA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1985 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に資材管理部配送センターにご連絡ください。●「聖徒の道」についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820



弟子たちの足を洗うイエス デル・パーソン画

最後の晩餐の席で、イエスは弟子たちの足を洗い、謙遜に奉仕すべきことを教えられた。「主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。(ヨハネ13:14-15)

表紙：秋の風景(ジェームズ・テイラー・ハーウッド画、18×32インチ、油彩、1926年、教会歴史部所蔵、ジュン・ローズ・ハーウッド・スプリングの許可を得て転載)

●—もくじ

喜びと幸福	マリオン・G・ロムニー	2
シオンの歌を5千回	ジョアン・C・オビアット	4
酒席での賢い作法——モルモン・フォーラム		8
各地のたより		10

喜びと幸福

第一副管長

マリオン・G・ロムニー

ロムニー副管長によるこの説教は以前になされたものですが、個人や家族の学習のため再び掲載します。

リーハイは、息子のヤコブに、人がどのようにして死すべき状態になったかについて、さらに永遠進歩の計画について説明した後、次のように言いました。

「……万物は万物を知る者の全智に由って成った。

アダムが墮落したのは人類を生ずるためであり、人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(II ニーフアイ 2：24-25)

ここで言う幸福は、次のように辞書で定義されています。

1. 良いものを獲得あるいは期待することによって湧き起こる感情、喜び、歓喜。2. 幸せな状態、至福。3. 幸せの原因となるもの。また、「物事の好ましい状態」とも書いてあります。

予言者ジョセフ・スミスは、幸福を次のように定義しています。「私たちの存在の目的である。また、私たちがそこに通じる道に従って行けば到達できる、存在の究極目標である。この道は、美德の道、公正の道、忠実の道、神聖の道であり、神のあらゆる戒めを守る道である。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」 pp.255-56)

幸福が必ずしも経済的成功を伴うものでないことは、救い主の次の言葉に表われています。「たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである。」(ルカ12：15)

無論、生き続けるためには、物質的なものも確保しなければなりません。生命の維持のために、この世の物も十分になければなりません。主ご自身も、私たちが物質的な面で平等にならなければ、霊的な面で平等になることはできないと言われました。完全に主の計画に従って生活できるようになったときには、私たちは物質的な面でも平等になるはずですが、これが幸福のすべてではありません。

人は、外部から与えられたものではなく、真の意味で幸福に

なることはできないのです。聖典には、救い主がこの地上におられたときに行なわれた肉体の癒しの例が数多く記録されています。確かにこういう癒しは、肉体的苦痛や病から人々を救いはしましたが、必ずしも本当の喜びと幸福をもたらしたわけではないのです。

本当の喜びや幸福は、霊的に癒されることによって得られるものです。それは内部から生まれ来るものなのです。モルモン経のモーサヤ書第4章の最初の4節を読んでみるとよいでしょう。ここには、ベンジャミン王の説教に聞き入っていた群衆が、みたまの力によって自分たちの犯した罪の大きさを認識したことが書かれています。自分たちの罪についてひどく心配した群衆は、主に向かって声高く叫びました。

「ああ憐れみたまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして、われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。われらは……神の御子イエス・キリストを信じ奉る。」(モーサヤ4：2)

こうして群衆は、キリストを信じ、悔い改めたために罪の赦しを受けることができました。そして罪が赦されたために、彼らの心は喜びで満たされ、また心の平安を得ました。彼らは霊的に癒されたからです。

救い主イエス・キリストは、私たちの霊を癒す力を持つ



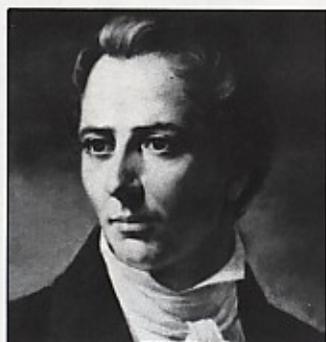
「汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。」(教義と聖約59：23)

ておられます。あらゆる人の霊は、それが罪の重荷を背負っている限り病んでいるのです。神のいかなる息子、娘も、神のみたまの力によってその霊が癒されるまでは、決して幸福になることはできないのです。人が赦しを受けると、その霊は癒され、心が安らかになります。それゆえ、みずからを完全な者にしようという努力に応じて、その幸福も増し加えられるのです。幸福になるためには、モロナイ書第7章でモルモンが述べている愛の特質、すなわち親切、忍耐、謙遜、仁愛を生活の中に取り入れることです。こうすることにより、モルモンがキリストの純粋な愛と言ったその愛を、心の中で育むことができるのです。これこそ、真の幸福へ至る道、人が私たちの天父のようになるための

道なのです。

リーハイの言葉によれば、人は喜びと幸福を得るために創造されましたが、その喜びや幸福は、この生涯においてのみ経験するものではありません。もし人が約束されている条件に合致した生活をするならば、現在の世で喜びと幸福とを得ることができますし、肉体を離れた霊として復活を待っている間も、またその後も永遠にわたって、喜びと幸福とを得ることができるのです。

主は予言者ジョセフ・スミスを通じて、次のように言われました。「汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。」(教義と聖約59：23)



幸福は「私たちがそこに通じる道に従って行けば到達できる、存在の究極目標である。この道は、美德の道、公正の道、忠実の道、神聖の道であり、神のあらゆる戒めを守る道である。」

聖典には、肉体を離れた霊の幸、不幸の状態が明確に記載されています。予言者ジョセフが「教会の律法を包含する」啓示と述べているものの中で、主は次のように言われました。

「汝相愛して共にこの世に生きよ。されば死にたる者を失いたるために涙を流し、ことに栄光ある復活の望みを有たざる者のためにいよいよ歎き悲しめ。」

およそ、われにありて死ぬる者は死を味わうことなし。そは死は彼らにとりて甘ければなり。

また、われにあらざりて死ぬる者は禍なるかな。そは、死は彼らにとりて苦ければなり。」(教義と聖約42：45—47)

また、アルマは息子のコリアントンに次のように教えました。

「さて死んでからよみがえる時までの霊の有様はどうであるかと言うに、ごらん、あらゆる人の霊はそれが善であっても悪であっても、この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神のところへ帰るのである。これは天使が私にお示しになった。」

それから義しい人の霊はパラダイスとなえる幸福な有様、すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみを離れて息む。

次に、悪人の霊は……そとの暗やみの有様に追い出され、

泣き悲しんで歯がみをするのである。これはかれらが自分で罪悪を犯し……た結果である。」(アルマ40：11—13)

ヤコブは、ニーファイ第二書第9章に書かれている偉大な説教の中で、次のように言いました。

「すべての人々が……復活するとかれらはすでに不死不滅となっているから、イスラエルの聖者の審判の座に出なければならぬ。」こうして裁かれた後、「イスラエルの聖者を信じ、この世の苦難を堪え忍び、世の辱しめを物ともしないイスラエルの聖者の聖徒である義人たちは、この世の始めからかれらのために用意された神の王国を受け嗣いで、その喜びはとこしえに充ち満ちる。」(IIニーファイ9：15, 18)

リーハイの次の言葉は、真に的を得ています。「人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(IIニーファイ2：25) 主がモーセに次のように言われたことから、私たちは主の望みが私たちの幸福にあることを知っています。「これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらずなり。」(モーセ1：39) また私たちは、アルマが息子のコリアントンに言った次の言葉が真実であることも知っています。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ41：10) これらの言葉は、まさに私たちが必要としているものです。

「人はみな現世に於て自由であり、およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか、または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから、その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか、これは全く人間の自由である。」(IIニーファイ2：27)

「それであるから、あなたたちは喜び勇め。そして、あなたたちは自分の思う通りに行う自由があるから、限りない死の道〔不幸〕を選ぶかまたは永遠の生命の道〔喜びと幸福〕を選ぶかは、各自の自由であることをおぼえておけ。」(IIニーファイ10：23)



シオンの歌を 5千回

ヒーバー・J・グラント大管長が讚美歌を
歌うために示した堅忍不拔の精神

ジョアン・C・オヒアット

「世の中には歌を口ずさんだことのない人が多くいる。私が今、自分の恥を人様の前にさらそうと決心したのは、私の苦勞を読んでなるほど思ってくれる人もいるだろうし、これなら自分にもできるからやってみよう、と思う人も出てくると思ったからである。」(注1) これは1900年に発行された「インブループメント・エラ」の中の、ヒーバー・J・グラントの言葉である。ヒーバー・J・グラントは使徒として36年間、大管長として26年間以上主に仕えた指導者で、堅

忍不拔を地でいく人であった。特に歌を歌うことに関しては、聖徒たちに絶えず希望の光を与えた人である。

グラント大管長が好んで引用した聖句は、教義と聖約25章12節である。「すべて心の歌は、われの喜びなり。然り、義しき者の歌はわれに対する祈りなり。彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん。」しかし彼にとって難題は、その「心の歌」をどうやって音声に表わすかであった。

グラント大管長はこう振り返る。「歌は生まれてからずっと好きでした。でも、

10歳のときに入った歌唱クラスの先生から、君はもう見込みがないよって言われてしまったんです。」以来30の年を過ぎるまで、グラント大管長は何かかまともに歌を歌えるように努力を重ねるが、どうしてもうまくいかない。冗談まじりにこう言った。「骨相学者に性格判断をしてもらいました。ところが彼の言うことが奮っている。「あなたにはできる。ただし練習中、私はあなたから40マイル(約64キロ)離れたところに避難したいと思います」と言うんです。実際に練習したの



アリゾナへ旅行に出たとき、グラント長老は讃美歌を100曲歌う決心をしていた。同じ歌を40回歌ったところで同行した長老たちはそれ以上歌うと神経衰弱になると言っ
て歌うのをやめさせようとした。

はテンブルトンという建物の中なんです
が、隣が歯医者さんで、廊下を歩いで
いた人は多分歯を削っている音だと思っ
たんじゃないでしょうか。」(注2)

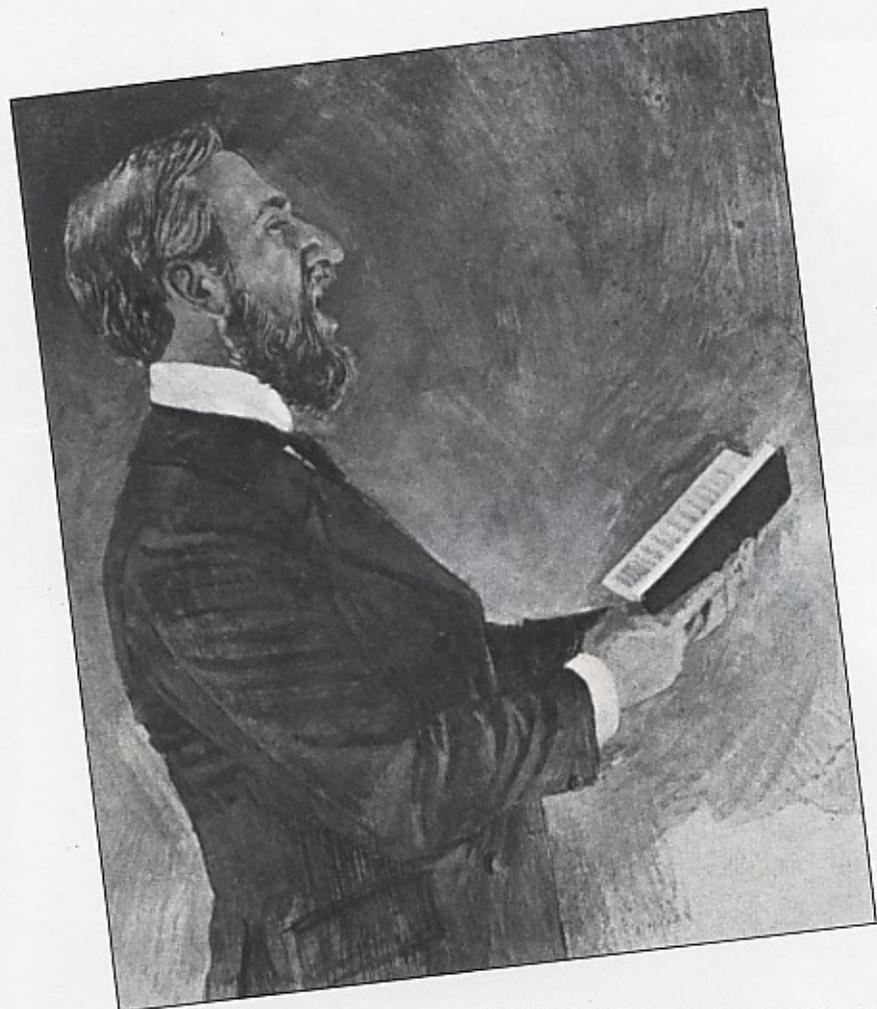
グラント大管長と歌の関係は以前から
有名で、大管長自身説教の中でこう話
しているほどである。「今まで大勢の友人
から、頼むから歌を歌うのだけはやめて
くれと言われました。……ある同僚の使
徒からは「ヒーバー、どうぞ入って。でも
歌わないでね」と言われる始末です。……
神殿での集会でも、幹部の兄弟たちはよ

くこういう表現を使いました。「それは、
グラント兄弟が歌を歌えないと同じよう
に、不可能なことです。」こうしてグラ
ントには歌は無理だということが万人の認
めるところとなったのです。」(注3)

しかし、グラント大管長はあきらめな
かった。「神からの賜」を求める心の叫び
を、彼はこう話している。

「私は半生をかけて、エライザ・R・ス
ノー姉妹が書いた『高きに栄えて』を何
とか物にしようと頑張ってきました。小
子供の頃、母親以外の女性で、ほかの

れよりも私のことをよく気に留めて母親
のようなアドバイスをしてくれた人、そ
して私のことをかわいがってくれた人が、
スノー姉妹でした。私はスノー姉妹が好
きでしたし、スノー姉妹が書いた『高
きに栄えて』も好きでした。そこでホ
レス・S・エンザイン兄弟にこう言った
のです。「あの歌を歌えるようになるん
だったら、4、5カ月間あいてる時間
を全部つぎ込んでもいいね。」すると
彼は忍耐力がある人ならだれでも歌
えるようになりますよ、と言ってく
れました。私はすかさず、忍



外した音はひとつも
なかったのです。
覚えるまで5千回は
優に練習したと思います。

耐力だけは自信があるからと答え、2時間その歌のレッスンをしてくれるように頼みました。それ以来ずっとレッスンを続けています。1日で115回歌ったのが最高です。」(注4)

グラント長老はこう言っている。「練習を始めたばかりの頃、ある有名な教会幹部が私の歌うのを聞いて、今は亡き十二使徒オルソン・ブラット長老の詩を思い出すと言うんです。彼によるとブラット長老の詩はたった一篇しかないそうで、それも寸法の狂った板を何枚もはぎ合わせたような詩なのだそうです。」(注5)

アリゾナに向かって旅行していたとき、グラント長老は、同行したラドガー・クラウソン長老とJ・ゴールデン・キンボール長老に、「きょう、讃美歌を100曲歌いたいんだけどどうだろう」と尋ねた。グラント長老はこう語っている。「ふたり

は私が冗談を言っているのだと思ったんですね。喜んで聞かせてもらうよと言ってくれました。ホルブルックからセント・ジョンズまで約60マイル(約96キロ)あります。「高きに榮えて」を40回歌ったところで泣きが入りました。残り60回歌えば神経衰弱になると言うのです。」でもグラント長老は、彼らの言葉に耳を貸さなかった。「約束は約束ですからね。ちゃんと100回歌わせてもらいましたよ。」(注6) 訪問先での大会で、グラント長老は独唱を試みた。「アリゾナのスノーフレークの大会でやはり『高きに榮えて』の独唱をさせてもらったんですが、出だしの音からもう狂っていました。」(注7)

このアリゾナでの失敗の後、グラント長老の目標貫徹の意志はますます強固なものとなっていく。同じ讃美歌を日に100回歌うこともまれではなくなった。「こうして2、3カ月後にはすっかり自信がついて、『高きに榮えて』と『奇しきみ業も

て』は大丈夫だと思ふようになりました。そこでエンザイン兄弟に、タバナクルで開かれる日曜学校大会で『高きに榮えて』を歌いたいんだけどどうだろう、と尋ねてみました。1万人収容の会場です。当日、会場は満席で、立っている人もいました。」(注8)

その晩グラント長老は舞台上に立って足がすくみ、緊張の連続だった。彼のももとの気持ちはこうだった。「若人たちに、私を見てやればできることを知ってほしかったのです。それに歌をみんなに学んでほしかったということもありました。しかし結果は失敗でした。どの小節をとってみても、音程はバラバラで、若人を元気づけるどころかがっかりさせてしまったのではないかと思いました。」

(注9) 大会の直前に何度も練習したのだが、そのときは一度も間違わなかったのである。それが大会衆を前にしてあがってしまった。声は上ずり、伴奏とも合わずじまいである。グラント長老は途中で間を置き、ピアノとキーが合っていない

いことを自分からユーモラスに話したが、会衆はその言葉に一生懸命笑いをこらえている様子だった。グラント長老は伴奏者にキーを変えるように頼み、とにかく4番まで歌い通した。「それからこう宣言したのです。『私は正しく歌えなかったことを知っています。(会衆は私が歌っている間ずっと笑いっぱなしでしたから)でも私はもう一度、いえ、間違わずに歌えるようになるまで、これからの大会で続けて歌っていくつもりです。』」(注10)

彼にはまったく悪気はなかった。それに何とか冗談で煙に巻いたつもりだったが、周囲の反応は冷ややかだった。「最初にタバナクルで歌を披露した日、家に戻ると娘のルーシーがこう言いました。『パパ、パパが歌っているとき一生懸命笑ってたのよ。じっとしていると涙が出てくるからよ。本当に恥ずかしかったわ。』」(注11)

彼は「最も親密な間柄の友人」であるリチャード・W・ヤング准将からも手紙をもらった。こうしたためてあった。「言いたいことはよくわかる。君にできればだれにだってできるということだろう。しかし微妙な要素をはらんでいるのは、究極的には嘲笑に耐えてはじめて成功がもたらされるという点だ。特に音楽の才能において常人と異なる使徒が、思慮分別のある人であるとの評判を捨ててまで歌に執着するのは割に合わないことだと思うのだが。」(注12)

しかし、とてつもない失敗をしでかし、家族や友人からも白い目で見られたにもかかわらず、グラント長老はくじけなかった。彼はこう語る。「この経験を通してますます頑張ろうという気持ちになりました。」(注13)

それから少しして夕食会があった。「出席していた人のひとりが私に『高きに榮えて』を歌ってほしいと言うのです。ところが同時に別の人が『奇しき業もて』が聞きたいと言いました。そこでスノー姉妹に伴奏をお願いしたのですが、彼女は『高きに榮えて』を、私は『奇しき業もて』を歌うものだとそれぞれ思っ

しまったのです。ところがうまいことにこの2曲は最初の3つの音符がまったく同じでしたので、スノー姉妹がすぐに気づいて、急きょ『奇しき業もて』に変えて伴奏してくれました。めでたし、めでたしというわけです。」(注14)

グラント長老の人前で歌おうとするとあがる癖はなかなか克服できなかったが、長老自身はうまくなっていると思っていた。目標実現近しと見ていたのである。「最初の頃は、もう全部と言っていいほど音が外れていたのに、それが自分でわかりませんでした。でも、訓練を積んだので、今ではどの音が外れているかわかるようになりました。」(注15)彼はピアノの助けを借りて、音程の練習を欠かさず行なった。こう書いている。「初めの頃は私の音とピアノの音が違っているのはざらで、しかも違っているのがわかりませんでした。今は耳が慣れてきて、こうした間違いはわかるようになりました。明らかに『音痴』が次第になくなってきているのです。」(注16)「初めの頃と比べると、覚える時間は10分の1以下ですね。」(注17)彼は喜々としてそう書いているのだ。

そしてグラント長老が43歳のとき、運命の出会いが待っていた。あるワード部の集会所で、かつて彼に見込みがないと言ったあの音楽の教師、チャールズ・J・トーマス教授とばったり顔を会わせたのである。グラント長老はトーマス教授の方に歩み寄り、とうとう歌が歌えるようになったことを話した。「音階はまだだめなんです。けさも1時間ほど妻を相手にやってみたんですが、だめでした。でも歌える曲が2曲ありますよ。」「それはまったく信じられませんね。」トーマス教授はそう答えた。

そこでグラント長老はおもむろに『証明』をしにかかった。「私たちは集会所の部屋の隅の方に行き、小さな声で『奇しき業もて』を6番まで全部歌いました。信じられないというのが彼の感想でした。外した音はひとつもなかったのです。私は彼に、覚えるまで5千回は優に練習した

と思う、と説明しました。すると彼は私に、彼が当時指導をしていた神殿聖歌隊に入るよう要請し、それに応じた私は、以来ずっとメンバーとして活躍したのです。」(注18)

苦闘の足跡を振り返って、グラント大管長はこう述懐する。「物事はあきらめずに努力しているとだんだんにやさしくなっていく。それは努力の対象が変化したからではなく、私たちの力が増したからである」という言葉があります。私はそれを何度か実証してきました。今では新しい曲でも2時間練習すれば人前で間違いなく歌えますし、レパートリーも200曲を越えるまでになりました。……私は、歌を歌えるようになったことは私の半生で最大の出来事だと思っています。」(注19)「タバナクルやそのほかの場所で皆と一緒に立って讃美歌を歌うこの喜びは、だれにもわからないでしょう。いくらやってみてもだめだったものができるようになったのですから。それだけではありません。シオンの歌の言葉も大好きなのです。」(注20)

注：

1. 「歌唱指南」「インブルーメント・エラ」1900年10月号、p.886
2. 「大会報告」1900年4月、p.61
3. 「大会報告」1901年4月、p.63
4. 「大会報告」1900年4月、p.61
5. 「歌唱指南」p.887
6. 同上、p.889
7. 「大会報告」1900年4月、p.61
8. 「私はどうして歌えるようになったか」「アメリカ人の中で」からの再版、p.3
9. 「歌唱指南」p.888
10. 「私はどうして歌えるようになったか」p.3
11. 同上
12. 「歌唱指南」pp.887-88
13. 同上、p.887
14. 「大会報告」1901年4月、p.63。ふたつの讃美歌ともグラント大管長の時代はメロディーが今のものとは異なっていた。最初の3つの音符が同じなのは、当時のメロディーのことである。
15. 「大会報告」1900年4月、p.62
16. 「歌唱指南」p.890
17. 同上、p.889
18. 「私はどうして歌えるようになったか」p.3
19. 同上、p.5
20. 「大会報告」1901年4月、p.63

酒席での賢い作法

過 去18年間、私は家族の中でただひとりの末日聖徒でしたから、家族の集まりや結婚式には決まって酒の宴に出くわしました。そうした経験の中から、私は以下の事柄を学びました。

1. 酒を勧められたときには、丁寧に断わりして、ほかの飲み物を頼む。

私はたまたまジンジャー・エールが入っているので、いつもそれをお願いするようにしていますが、そのほかジュースなどいくらでも代用はできます。

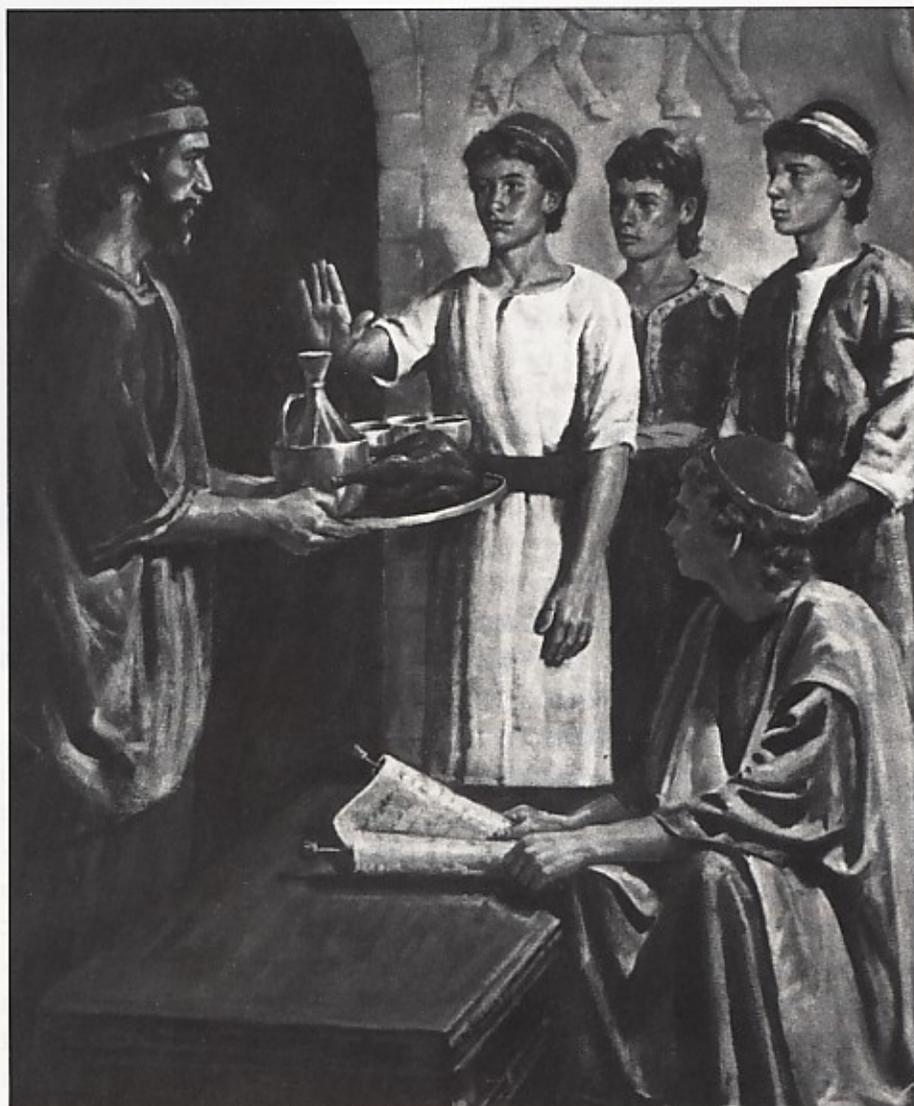
「結構です」と断わりするより、代わりの飲み物をお願いした方が、招いた方も気が楽なようです。

2. 一部例外はあるにしても、一般に酒席では、なぜ酒を飲まないかなど福音の原則について議論するのはふさわしくない。そうした場では、主のみたまが強く宿ることはないからである。

そうは言っても、福音の種をまくことはできます。私は機会ある限り、末日聖徒であるがゆえに酒を飲まないことを説明するようにしています。そうすることにより、教会に対して良い印象を与えることができるし、将来の福音の話合いのきっかけをつかむことにもなるからです。

3. 酒を飲む人の多くは、気分を楽にし楽しむために酒が必要だと思い込んでいる。酒がなくても楽しめることを模範を通して示すなら、そうした人々の考えを変えることができる。

家族の結婚式の写真を見た私の親戚が、いささか驚きながらこう言っていたのを思い出します。「一番楽しそうにしているのはあなたたちふたりじゃない。」これは写真を見た全員の一致した意見だったのです。(アリゾナ州メサ、デビー・マッキンレー)



王の食物と酒を断わるダニエル

(ダニエル1参照)

デル・パーソン画

思いやりの心を持って接する

医者の妻として、また州で毎年ひとり選出される「マザー・オブ・ザ・イヤー」に選出された者として、末日聖徒である私は、しばしば酒席に招かれました。そうした場で、異なる標準を持った主催者や臨席の方々に思いやりの心をもって接することは、教会の教えに従い、私個人の標準を守るうえで大いに役立つことを知りました。

そのような方々と交わる際に、私は相手の関心を呼びそうな話題を心がけるようにしています。話はお互いに関心があってこそはずむもの、相手にそうあってほしければまず自分から、というのが私のモットーです。そこで私は、相手の方からご自身のことや関心事を引き出すように気を配ります。話し相手が自分に関心を示し、自身の目標や価値観に興味を示しているとわかると、人は話に熱中してくるものです。(アイオワ州マウント・バーノン、ミルドレッド・パーセル)

決しておすかしくない
「いいえ」のひと言

スウェーデンから来た私は、カリフォルニアに移り住んで1年8カ月になります。ここではよく社交の場に足を運び、酒席に臨ずることもよくありますが、困ったことはありません。酒はお断わりしても、そこで話が終わるわけではなく、かえって互いの興味は増し、話

に花が咲きます。前回、仮装パーティーに同伴した私の友人は、今宣教師からレッスンを受けています。

私が酒をいただかないからといって、それをとやかく言う人はひとりもいません。その人なりの生き方を受け入れる私を、他人も受け入れてくれるのでしよう。教会の標準に合わない生活をする人々に同調することはできませんが、人間として私はその人たちが好きです。相手もそのことをわかってくれますから、付き合いに支障はありません。ほんの少し気をつけることで、私たちはいつでも悪しき事柄を良きに転ずることができるのです。(カリフォルニア州ロサンゼルス、イヴァ・ヘリー)

からかわれたら笑顔で応える

酒を飲まないことではからかわれたら、笑顔で応えるようにしています。

(からかうというのはたいていの場合、それほど悪意があつてのことではないのです) 私が説教じみた態度に出ない限り、他人も私が酒を飲まないことを気持ち良く受け入れてくれるものです。

まれにですが、酒席が度を越してきたと思えるときには、丁寧に申し開きをして(翌朝早起きのためなど)、失礼することにはしています。

私たちが酒を飲んでいる人々に対して優越感を抱いているような素振りを見せない限り、酒を飲む人も飲まない人も気楽にその場を楽しむことができます。私を見て、酒をやめた家族や友人が何人もいますが、うれしいものです。(イリノ

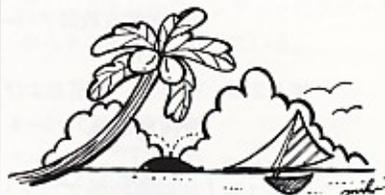
イ州リンデンハースト、カレン・B・ノールトン)

理解ある非教会員の友人

非教会員の私の友人は、酒席で私をよく助けてくれます。私に代わって、酒を断わってくれるのです。そして、誇らし気にこう言います。「彼女は末日聖徒なので、お酒を飲まないんですよ。」実際、私がお酒を飲まないことはよく知られていて、どこに行ってもほかの飲み物を用意してくれます。(テネシー州ナッシュヴィル、ベード・アンダーソン)

|チ|エ|ツ|ク|リ|ス|ト|

1. 主催者側への礼儀として、常に話の仲間入りができるように心がける。
2. 酒を飲んでいる人々に対して、酒を飲まない自分が勝っている、という印象を与えてはならない。
3. 酒を勧められたときに友達がかばってくれたら、その好意を気持ちよく受け入れる。



各地のたより



東京神殿別館 新築工事始まる

—島袋神殿長管理の下に執り
行なわれた鍬入れ式—

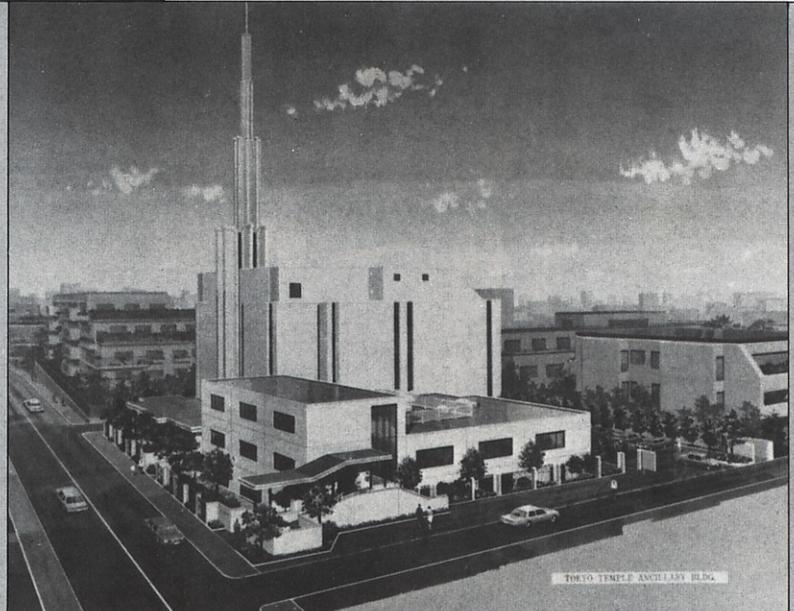
- 左より守屋兄弟(設計士), 北村地域監督, 島袋神殿長, 相良地区代表, 富武一等書記官
- (下) 東京神殿別館完成予想図

東 京神殿用地内に神殿附属施設として長い間待ち望んでいた別館の建築工事着手のための鍬入れ式が地域会長会会長のウイリアム・R・ブラッドフォード長老の指示の下に、サム・K・島袋神殿長の管理で、去る7月12日に執り行なわれました。

神殿長ご夫妻をはじめ渡辺驪第一副神殿長、レイモンド・C・プライス第二副神殿長ご夫妻、神殿宣教師、担当地区代表の相良健一長老ご夫妻、前田修東京南ステーキ部長、鈴木正三長老、岡本亮長老、および近隣の中華人民共和国大使館から一等書記官の富武氏と有栖川スタジオより三橋達也代表の代理の亀石氏等の来客の参加を得て、今井一男兄弟の司会で厳肅な内にもなごやかに式が進められました。

建築の規模および主な用途は以下の通りです。

- 延床面積 2,023m² (約620坪)
- 階数 4階建 (地下1階, 地上3階)
- 用途 地下1階 神殿参入者のための仮宿泊所と休憩所
- 地上1階 宣教師訓練センターおよび神殿宣教師アパート (6戸)
- 地上2階 礼拝堂, 教室および神殿宣教師アパート (2戸)
- 地上3階 神殿宣教師アパート (3戸)
- 工期 1985年7月—1986年6月中旬



新たに郡山地方部 組織さる 新地方部長に菅泰弘兄弟



19 85年5月26日、仙台ステーキ部上杉ワード部にて開かれた特別大会において、念願の郡山地方部が組織されました。郡山、いわき、会津若松の3つの支部、会員数500人弱の小さな地方部ではあ

りますが、希望にあふれた素晴らしい地方部です。

私たち家族は、1979年秋に郡山に転入してまいりましたが、そのときからことあるたびに仙台に行き、多くの恵みをいただく

各地のたより

ようになりました。祝福をいただきながらも、仙台での集会に集うために求められる時間と経済的犠牲を、何とか少なくしたいものだとの思いも強くなっていました。

昨年春、藤村ステーク部長との面接の中で、仙台ステーク部の分割と郡山地方部の組織について具体化が急がれていることを耳にしたときは、非常にうれしく思いました。一日も早くその日が来るようにということが私の祈りの中に加わったのは、そのときからでした。郡山地方部が誕生すれば、特に会津若松支部といわき支部の兄弟姉妹たちの犠牲が軽減され、歩みを早めるよう期待されている今日、さらに効果的に働けることははっきりしています。

しかし、地方部誕生の日は1984年の秋が冬に遅れ、冬が1985年の2月の大会に、そして春にと延期されてきました。まだ準備が足りない、さらにふさわしくなろう、一生懸命頑張ろうと決意を日々新たにしていた時期でした。

そんな5月、藤村ステーク部長から「26日に特別大会を開き、郡山地方部が組織されます」とのお電話をいただき、長い間(といっても6年弱)待った郡山で大会などを開けるという祝福に心から感謝いたしました。

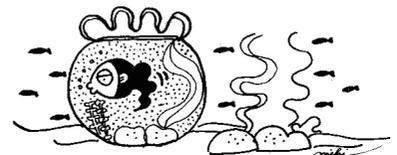
大会前日の25日の朝、仙台伝道部の青柳伝道部長から、「きょうお会いしたいのですが……」とお電話をいただき、夜面接を受けました。「菅兄弟を郡山の地方部長に

……。」その言葉が私の心にどれほど重々しく入ってきたことでしょうか。その伝道部長の信仰と愛を感じさせる面接により、さらに主に忠実であろう、兄弟姉妹のために熱心に働こうと心に決めました。そのあと、伝道部長は妻にも会って、地方部長の召しについて話したあとで質問されました。「菅兄弟を地方部長として支持なさいますか？」それに対して妻が「彼を一番支持しているのは私です」と支持を表明してくれたことに心から感謝しています。さらにふさわしくなろうと再度決意したことは言うまでもありません。

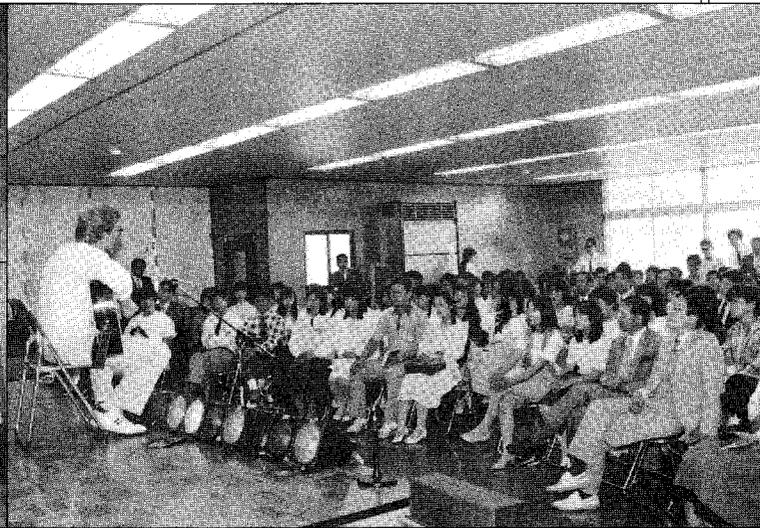
私の敬愛する仙台ステーク部の藤村ステーク部長をはじめとする仙台ステーク部のすべての指導者、会員の皆様の愛と信仰に心から感謝しています。

強い信仰と愛に富み、謙遜また柔和であられる大石哲郎、斎藤雄仁両副地方部長、書記の清野克純兄弟を中心に、今郡山地方部は、すべての兄弟姉妹が福音を家庭の中に取り入れ、信仰生活を十二分にエンジョイできるよう、力強く動き始めました。

郡山ステーク部が組織される日がすぐそこに来ていると感じる毎日を過ごせることに心より感謝しています。確かに末日聖徒イエス・キリスト教会は全地の面における唯一の真にして生命ある、しかも主の喜ばれる教会であることを証いたします。(かん・やすひろ 1952年生まれ)



各地のたより



190人参加し、多彩な催し 山口地方部「'85エメラルドの祭典」

- (写真左) 3年連続エメラルド大賞を受賞した宇部支部の「つるの恩がえし」
- (右) 各行事に参加して祭典を盛りあげたゲストのケント・デリカット兄弟

去る5月2-4日、山口県宇部全日空ホテルにおいて山口地方部長の藤竹幸雄兄弟の管理のもとに、第8回エメラルドの祭典が開催されました。

この祭典は、今まで広島、高松ステーキ部が担当していたことから、山口地方部としては初めての大きな行事でしたが、地元山口県はもとより、広島、岡山、四国、遠くは東京から多くの兄弟姉妹が参加され、参加者数も189名という今までの最高を記録した素晴らしい祭典となりました。

今回はゲストにケント・デリカット兄弟をお迎えして、伝道および結婚をテーマに3日間のプログラムが進められました。

祭典初日の夜は、各地の兄弟姉妹によるバラエティショーが行なわれました。松山ワード部の演劇「時をかける少年」や南国支部によるハワイアンダンス、坂出支部の兄弟からはオリジナルの歌、また、教会員のご家族による剣舞などが披露されました。それらの中で今年のエメラルド大賞は、宇部支部による劇「つるの恩がえし」に輝きました。

翌日の午前中は、オリンピックならぬモルモンピック運動会が抜けるような青空の下で行なわれ、チームワークを誇るニーフアイチームが優勝しました。

夜は、昼のモルモンピックとは違って変わり、華麗に変身した兄弟姉妹がおいしいディナーに舌鼓を打ったあと、素晴らしい

生バンドの演奏に合わせてダンスを楽しみました。ラストダンスでは、自然に参加者全員が手をつないでひとつの輪になるという今までにない盛り上がりを見せました。

最終日は、会場を宇部支部に移し、最後のプログラムである「エメラルドに手をつなごう」が行なわれました。

このプログラムは、祭典のテーマである『伝道・結婚』に重点が置かれ、ケント・デリカット兄弟、松本副伝道部長による特別セミナーに多くの兄弟姉妹が真剣な面持ちで臨み、霊的な証を得ました。

このエメラルドの祭典を陰で多くの人々が支えてくださいました。吉岡公夫第一副

地方部長がみずから実行委員長を務められ、地方部長会をあげてご指導くださり、また高松のステーキ部長でいらっしゃる田染洋一兄弟をはじめ、多くの方々のご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

この3日間を通し、兄弟姉妹が多くの友人を作り、また力強い証を得て帰途に就く姿を見て、私たちスタッフも各々すばらしい証を得ることができました。このように成長する機会が与えられましたことに感謝し、この祭典を通じて得た様々な経験をこれからの信仰生活に役立てていきたいと思えます。(レポーター：「'85エメラルドの祭典」実行委員・日生晃克)



伝道は始まっている —フィリピンバギオ伝道部が任地—

福岡ステーキ部福岡ワード部
松元 春美

伝道へ行こうと決めてから早くも1年が経ってしまいました。8月には行ったこともないフィリピンで伝道しているかと思うと、正直言って少しの不安もないわけではなく、多くの面で「私には

荷が重いのではないだろうか」と考えることもありました。

せっかく両親に死に物狂いで許可を得て、ここまでこぎつけることができたことや、またほかの兄弟姉妹たちもたくさん問題

各地のたより

がありながらも、伝道というものに正面からチャレンジしている姿を見ると、私はやはり自分に与えられた責任は最後までやり通さなければと強く感じました。

そんなある日、福岡ワード部の姉妹宣教師が3人になってしまい、私は、ステーキ部宣教師ということもあって、アパートに住み込んで20日間だけフルタイムで働く機会に恵まれました。

宣教師の生活は、思ったより大変でした。これまで会員として恥ずかしいくらい宣教師を理解していなかった自分に気がきました。そして、どれだけ自分が霊的に、身体的に、精神的に準備しなければならぬのかを思い知らされました。

しかし、次第に慣れてくると、伝道することが楽しく、毎日朝が来るのが待ち遠しくさえてきました。その中で、同僚関係がいかに大切であるかを学ぶことができ

ました。

同僚との関係がうまくいっていなければ、伝道は成功しません。どこへ行くのもふたり。宣教師にはプライベートというものがほとんどないと思われるほどです。しかし、同僚から多くのことを学ぶことができます。互いに助けられたり助けたりしながら、ふたりはさらに成長することができるのです。

ふたりでレッスンをしていたある日、同僚は、求道者に自分が不活発だった頃の証をしていました。モルモン経から聖句を読んでいるとき、涙を流して求道者に訴える姿を見て、その場に強いみたまを感じました。そのとき確かに、私たちはひとつでした。同僚の手をテーブルの下で強く握りしめ、互いに励まし合い、求道者に証をできた喜びは、今でも私の胸の内に強く残っています。

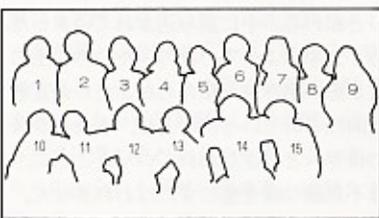
また、家々を訪問していたとき、どなた

も話を聞いてくださらなくて、最後の1軒というときに興味を示してくださり、お話を聞いてくださったときは、涙が出るくらいうれしいものでした。帰りに同僚と大声を張りあげて讃美歌を歌いながら、「伝道って本当にすばらしいね」と何度も何度も互いに確信し合い、確かに自分たちは神の使いであると感じることができました。

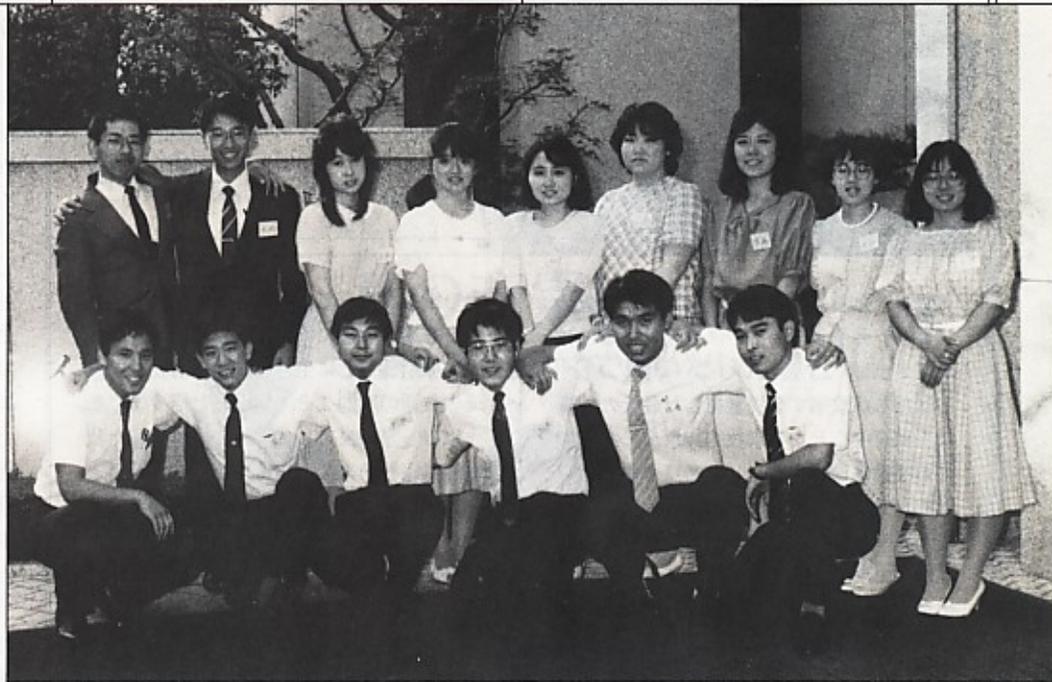
そのような20日間を終え、今私は同僚が欲しくてたまりません。むしろ、伝道地へ早く行きたくて仕方がないと言った方が正解かも知れません。最初の頃のような不安はまったくなくなり、今は希望だけがあふれています。

神様は、私の心から不安を取り除いてくださり、その代わりに喜びと平安と希望の種を植えてくださいました。私はこれからその種を育てて行かなければなりません。そうすることによって、私は、さらにその

7月に召された JMTC第74期生 15名の名簿



S：ステーキ部，M：伝道部
W：ワード部，B：支部



<名 前>	<出身地>
1. 番 場 和 哉	札幌S/札幌東W
2. 中 村 昭 雄	東京西S/府中W
3. 松 本 睦 子	町田S/藤沢W
4. 若 槻 由 美 子	岡山S/倉吉B
5. 山 下 孝 子	町田S/藤沢W
6. 山 田 久 美 子	札幌M/帯広B
7. 後 藤 早 苗	BYUモリスW
8. 水 谷 喜 美 江	札幌M/帯広B

<伝道地>
神戸伝道部
神戸伝道部
仙台伝道部
東京北伝道部
仙台伝道部
名古屋伝道部
神戸伝道部
東京南伝道部

<名 前>	<出身地>	<伝道地>
9. 北 原 都 子	福岡S/二日市B	仙台伝道部
10. 武 敏 之	町田S/湘南W	台湾台北伝道部
11. 岩 崎 裕 治	大阪S/枚方W	東京北伝道部
12. 前 田 信 雄	大阪S/枚方W	札幌伝道部
13. 大 嶋 武	大阪北S/茨木W	名古屋伝道部
14. 佐 藤 龍 象	仙台M/鶴岡B	福岡伝道部
15. 岡 田 浩 和	広島S/安古市B	福岡伝道部

各地のたより

実を自分自身で刈り取ることができ、食べることもできるのです。すべてが私自身のためでもあることを知っています。

神様は何もかも私たちのために与えてくださいます。私たちが神様に差しあげることができるのは、私たち一人一人が成長し、神様のみ前にふさわしくなることです。そのことを考えると、私の伝道はもうすでに始まっていると感じます。

今は何の恐れもなく歩くことができます。神様とイエス・キリストが生きてましますことを知っているからです。これほどに強い味方がありましようか。私は、これから

も主の僕となって働きたいと思います。そして、これからの1年半の間、私のすべてを主にゆだね、喜んで伝道したいと思えます。私は、神様とイエス・キリストが確かに生きていらっしゃることを証します。この教会は地上における真の教会であることを心から証します。(まつもと・はるみ 日本人として初めてフィリピンの地に召された。7月にユタ州プロボの宣教師トレーニングセンターで訓練を受け、8月にフィリピンバギオ伝道部に赴任する。看護婦としての資格を持つことから、福祉宣教師としての召しも受けている)

けさせることとなったのです。

昨年の6月末頃、妻から、ふたりの外人宣教師が我が家を訪問していることを聞きました。7月中旬になって、妻は、今度は私にも会って欲しいと言ってきました。断わっても断わっても訪問を続けるふたりの宣教師に、根負けしたのかも知れません。私は妻の頼みに、一度だけという条件をつけて会ってみることにしました。

その約束を伝えた日に、ふたりの宣教師が、私のためにと一冊のパンフレットを残していきました。それは、「モルモン教徒について」というパンフレットでした。

「末日聖徒イエス・キリスト教会」という長々しい名前を覚えてくれた妻の言葉と、パンフレットの「モルモン」の文字を不思議そうに見ている私に、妻は「モルモン教会」とも言うように教えてくれました。妻の説明に耳を傾けながら、私の目は「モルモン」の4文字に釘づけにされたように、その文字を一字一字追っていました。

30年前、私が19歳のとき、外人キャンプで働く機会を得た私は、いつも片手に聖典を持ち、声をかけてくれるふたりの兵士と友達になりました。そして、幾度か教会にも誘われ、行ったことがありました。

ふたりの兵士が帰国の折に、私の手に残していったのが、「モルモン経」でした。それは、1ページすらも目を通されることなく、いずこかへ消え去ってしまいましたが、「モルモン」の4文字だけは、しっかりと私の心の中に刻み込まれていました。この4文字によって、あのふたりの兵士のことが思い出され、私の心がふたりの宣教師に向けられていったことに、またキリストの世界へといざなわれていったことに、私は不思議な縁を感じずにはおれません。

昨年の7月下旬、私たちは家族全員でふたりの宣教師を迎え入れました。期待する中にも大きな不安があり、朝からその日は落ち着きませんでした。父や母、先祖に対する裏切りにも似た感情と、新しい世界への期待と不安が交錯する中で、私は動揺し、落ち着きを失っていました。

ふたりの若い宣教師のまじめで謙虚な態度に、また親しみのある表情を見せる心やさしい眼差しに好感を持つとともに、時折、それらが30年前のあのふたりの兵士の表情と重なってくるのでした。こうして宣教師が自分たちの父を語り、母を語り、兄弟



家族は永遠に

—家族を支える土台である
末日聖徒の信仰—

東京北ステーク部
浦和ワード部

上野 英信

私たちは、昨年9月30日、家族全員そろってバプテスマを受けることができました。

私たちが改宗する決意をした最大の動機は、私を中心とする宗教的背景が、あまりにも複雑化していたことにあります。

亡き父は神道、亡き義母は日蓮宗、母は浄土真宗を信じ、妻と末娘の真理子のふたりは「エホバの証人」のレッスンを受けていました。長女香織と長男英一郎のふたりは懐疑的とも無関心とも受けとれる立場にあり、私はといえば、祖母の影響を受け、仏教を生活信条の基本とする生き方を通してきていました。この家族内部の宗教的背景を見て、私は「これでいいのだろうか。死後の世界、来世では、私の家族はどうなるのだろうか。父や義母と会えるだろうか」という疑問や不安を抱いていました。

「永遠に家族は共にありたい」——これが、私たち家族の最大の願いでした。しかし、思いとは裏腹に、現状における宗教的背景からすると各々が別々の世界に散り行き、

会う機会を失ってしまうような気がしました。家族が永遠に共に暮らすには、皆が共通の原則のもとに生きることが必要です。その共通の原則こそ、信仰だと悟りました。

私は一家の長として、この複雑化した我が家の宗教をまとめる責任があると思えました。

仏教の立場でしか考えることのできない私は、無意識の内に、仏教的家族の統一を考えていました。しかし、反面、仏教界の争いや仏教徒とは名ばかりの信徒ら、形式化され、仏の供養が中心となり、生者を救う道が閉ざされてしまったような現状の中で、私は、それでも仏教の世界にこそ生きる道があると信じ、そして悩みました。

妻と真理子がときどきレッスンを受けたり、教会に行ったりするのを見て、心の中で、これでいいのだろうかかと煩悶しました。「釈迦の世界」「キリストの世界」に我が家が二分しているのを見るのは不安でした。

しかし、そのうちに妻と娘の行動は、私に仏教の世界からキリストの世界に目を向

各地のたより

姉妹について語る頃には、すっかり打ち解け合い、なごやかな雰囲気の中で、いつしか次のレッスンの約束をしていました。

宣教師は、つたない日本語で、額に汗しながらレッスンをしてくれました。しかし私たちは、彼らのつたない日本語ゆえにそのメッセージに真剣に耳を傾けることができませんでした。もしも、ふたりが流暢な日本語で福音を説いていたとしたら、私たち家族全員が熱心に神について学ぶ努力をしたかどうかは疑問です。つたない日本語であったからこそ、注意深く、レッスンに集中できたものと思うのです。そして、私たちはそろって神の王国へと導かれていきました。熱心な宣教師たち、大勢の兄弟姉妹のその謙虚な姿や敬虔な祈りを通して、私たちは励まされ、勇気づけられて、次第にキリストの世界へと足を進めていったのです。

同じテーブルで、同じテーマを、親と子供たちが共に学ぶことの楽しさとすばらしさを知ることができました。宣教師の言葉にじっと耳を傾ける妻や子供たちを見ていると、「私の家族、私の子供」が「神の家族、神の子供」であると教えてくれた宣教師の言葉に、私は今までの自分の行ないに対して、反省を促される思いでした。

宣教師や教会の兄弟姉妹との対話は、除々に私の心の中の不安を消していってくれました。そして家族を支える土台、それは信仰であって、その正しい真の信仰なしには平和な家庭、幸福な家庭は存在せず、永遠なる家族も存在しないことを知りました。

30年前、ふたりの兵士が、私の心の中に主イエス・キリストを信じる信仰の種子をまき、ふたりの宣教師が、その堅い殻を破るために遣わされたものと考えるとき、どちらの出会いも偶然の出来事とは思えず、目に見えない力で導かれたように思えてなりません。

私たち家族全員がそろってバプテスマを受けられたのも、宣教師をはじめとする浦和ワード部の兄弟姉妹の励ましによるものであり、心から感謝したいと思います。

改宗後、私たち家族は、共に主イエス・キリストを信じる信仰の道を歩み、共に安息日を守り、また祈りのひとときを持つことができるようになりました。

家庭の中で、家族の祈りに接するとき、疲れた身も心も救われる思いがします。そして、すばらしい家族に恵まれたことを感

謝せずにはられません。

祈りを通して一日を反省し、家族全員の無事感謝し、身近にいる家族を再認識して各々が心の奥深くに秘めている家族への愛を感じ、その心のこもった言葉に、言い知れぬやすらぎと幸福、祝福が家庭の中に満ちているのを感じます。

また、祈りが正しい判断、正しい行ないへと導き、家族の愛を強め、幸福な家庭作りの中心ともなるものであることを自覚し、全員が敬虔な祈りに徹するよう心から願うものです。

永遠なる家族、幸福な家庭を願い、共に歩み始めた道ですが、「神権者」としての自分の姿に悩んだ時期もありました。

「親権者」として家庭にあって、思いのままに振る舞ってきた自分の言動が、主の戒めに反するものであると知ったとき、妻や子供たちの目が、「お父さんは神権者でしょう？」と訴えているように思え、私の心は重く沈みました。自分の思うまま、自分の意思の赴くままに、家庭の中に自分の律法を制定し、強要し、それに違反するものは何の根拠も権威もなくして厳しく罰してきた自分を反省しました。

しかし、「神権者」の重責を負い、悩んで

いた中で、息子の「最近のお父さんは子供に甘すぎる。もっと厳しくすべきだ」という言葉に、私の迷い、悩みなどは消え去り、また「神権者」としての自信を得ることができました。

子供たちの一人一人が、主の戒めを忠実に守りながら成長している姿が、私の目にもはっきりと映ります。その成長を知るほどに、みずからも「神権者」として、一層成長しなければならぬことを自覚するのでした。

昨年12月に亡くなった妹の娘利恵子が、4月から我が家に新しく加わりました。利恵子は、みずからの意思で正しい信仰を選択し、5月にバプテスマを受けました。共に教会に集い、主の道を歩むことができましたことを心から喜んでいきます。

私たち家族は、宣教師や多くの兄弟姉妹に励まされ、助けられながらここまでできました。これからも、家族全員、共に歩き進むことを誓ったこの信仰の道を、主に頼り、一步一步進んでいきたいと思えます。(うえの・ひでのぶ 1934年生まれ、浦和ワード部日曜学校第二副会長)

私の改宗と結婚

—断食と祈りの中で見いだした導き—



高崎ステーキ部
高崎東ワード部

井木 正信

私 がバプテスマを受け、この真実の教会の会員となったのは、1971年11月20日のことです。その2週間前に、あるご家族に連れられて、末日聖徒イエス・キリスト教会（当時の東京第4ワード部）に初めて出席しました。

前日の土曜日の夜、隣に住んでいた方からこのご家族のことを知り、私は聖書を持って、その家を訪ねました。当時私の集

っていた教会（エホバの証人）から末日聖徒イエス・キリスト教会へ家族全員で改宗されたと知らされたときは、信じられませんでした。なぜなら自分の行っていた教会こそ唯一の真の教会であると信じていたからです。

彼らは親切に私を迎えてくださいました。ご主人は最初聖書を使って私の集っていた教会の間違いを指摘し、モルモン経やジョ

各地のたより

セフ・スミスの経験についても教えてくださいました。それまでカトリックの神父やプロテスタントの牧師などいろいろな方と話しましたが、皆聖書からモルモンの主張が正しくないことを指摘していました。それも絶対の自信を持ってです。このご主人が教えてくださいましては別でした。私は何も反論することができませんでした。

彼らの家を後にして家路に就いているときは、私の視界をふさいでいた黒雲が割れ、一条の光が射すのを見るようでした。何か温かいものが全身を包み、希望が心の底からわいてくるのです。明日は日曜日で、彼らと車で待ち合わせをして彼らの教会へ行くのです。

日曜日、洗足池のそばにある教会堂に初めて入りました。神権会、日曜学校と出席して、その後礼拝堂に入り、聖餐会が始まったそのとき、私は全身に鳥肌が立ち、ぶるぶると震えて何かに捕らえられたようになり、涙が止めどなく出てきました。私はこのとき、長く求めていた神の愛に接し、その胸に抱かれた思いでした。

それまでの私の人生は苦難の連続でした。小学校3年で父を交通事故で亡くし、母とも別れ、親戚にあずけられた少年時代。母、姉、妹と共に三畳一間のアパートで過ごした中学時代。ノイローゼの連続だった高校時代。そしていろいろな本をあさり、真理を求めても得られなかった苦悩の青年時代。19歳になり、希望をまったくなくして死ぬことしか考えられなかった絶望のとき、妹が購読していた「ものみの塔」という雑誌で初めてキリストというお方について知ったのです。どんな本でも得られなかった真理を見つけたような思いに駆られ、聖書なる書物に最後の望みを託して学んでみようと思い、その教会に入りました。しかし人格形成をするうえでの私の悩みは深く、ギャップを感じるばかりでした。

では、末日聖徒の礼拝堂で感じた強いショックは何なのでしょう。それまでの教会では得られなかった靈感でした。このとき私は、霊においてはっきりと、この教会が真実であるとの強い証を得ました。それで十分でした。聖餐会の後、ある会員の方にバプテスマを受けさせてくださいとお願いしました。宣教師に紹介されレッスンは始まりました。モルモン経や教義と聖約から驚嘆すべき真理を学び、怖いほどこの教会が真実

だとわかりました。レッスンは10日ほどで終わりました。

私は三浦半島の民宿に一泊し、断食してモルモン経を読みふけりました。午前3時に読み終わり、神に尋ねました。私は心にとても熱いものを感じ、涙がほおをつたい、神が生きておられ、この末日聖徒イエス・キリスト教会こそ真のイエス・キリストの教会であるという答えを受けました。また、この教会に入り、福音をさらに研究して実践するならば、この世においては幸福を、来世では永遠の生命を得ることができ、天父のみもとへ帰れることを知りました。

その翌日が私のバプテスマの日となりました。アロン神権をいただき、プリ・インスティテュートの教師に召され、東京第2ワード部（現在の中野ワード部）で福音を教える機会にあずかりました。アロン神権の教師の職にありながら、大祭司や長老の方々、また長く会員生活を送っておられる方々の前に立つと、それだけで全身が震え、脂汗が出てきたことが、ついこの間のことのように思い出されます。ましてやその生徒の中に私の永遠の伴侶となる人があるなどとは知る由もありませんでした。

ひと月に2度、必死の思いで中野へと通い、生徒とも次第に良い関係が築けるようになりました。生徒のひとりである山岸姉妹とも親しくなり、年齢がかなり離れていても逢うたびに何か心が温かくなり、久しぶりに故郷へ帰ったような懐かしい気持ちを味わいました。

家に帰り深く考えました。山岸姉妹は私よりも13年も早く地上に来て、いろいろな経験をしていたことがわかりました。考えを決めて祈りました。バプテスマを受けるときに三浦半島の民宿で祈ったときと同じように、心からの確信を得ました。

翌日プロポーズをして、彼女の承諾を得ました。さらにこの証を確かなものにするために、ふたりで断食をして祈りました。私はこのとき、彼女こそ最もふさわしい永遠の伴侶であると、強い答えを得ました。

1973年6月16日、東京第2ワード部で高橋実監督の司式のもと、会員の方々からの温かい祝福を受けて結婚式を挙げ、その年の8月にはハワイ神殿で結び固めの儀式も受けることができました。その後しばらくすると、神様は最も大きな祝福を我が家に送って下さいました。娘の誕生です。

神は私を聖められ、赦しを与えて下さいました。キリストへの真の改宗をすることにより、より多くの祝福を家族にもたらすことができました。私は、ここまで育ててくださった神様の大きな愛に報いるため、命じたもうすべてのことを行ないたいと決心しています。また、いろいろな形で私と家族に愛と忍耐を示して下さいました多くの方々に、心から感謝しています。最後まで耐え忍び、戒めを完全に守る者は、福千年でキリストと共に平安のうちに過ごせることを証いたします。(いき・まさのぶ 1946年生まれ、高崎東ワード部第二副監督)



福音という 愛の祝福

仙台ステーキ部山形ワード部
曾根原 洋

幼い頃、クリスマスが近づいてくると、亡き父がよくこんな話をしてくれました。「クリスマスというのはただ酒を飲んだり、ばか騒ぎをしたりするためにあるのではなく、イエス様が生まれたのを記念するすばらしい日なんだよ。」そして神様について、聖書について、幻燈を使って教えてくださいました。ノアの箱舟の物語や、みどり児イエスについての話などが脳裏に焼きついていました。

私には兄弟がたくさんおり、物質的には決して恵まれていたとは言えない少年時代

各地のたより

でしたが、家庭の中はいつも温かい雰囲気
が満ちており、幼いなりにとても平和な気
持ちを感じていたことが思い出されます。

そのような正しい模範をいつも目にし
てきたはずの私ですが、いざ家族を養う立場
となって、自分の幼い頃の家庭と比較した
とき、我が家には愛も平和も見いだすこと
ができず、その違いには目を覆うばかりで
した。特に、この教会を知る前の私は、神
様の道を歩むどころか、タバコと酒がやめ
られない、意志の弱い、怒りっぽい父親で
した。

日光長老とジェンタ長老と名乗るふた
りの宣教師が我が家を訪問してくださったの
はそんなときでした。そして、多少キリス
ト教について知っているという思いから高
慢になっていた私の心を見透かしたかのよ
うに、日光長老がこうおっしゃいました。

「あなたが真剣に心から神様の話を聞き
たいのなら、喜んでお話ししましょう。そう
でないのなら、もう来ることはないでしょ
う。」私はそのときほどショックを感じた
ことはありませんでした。心の中に大きな
穴があいたようでした。彼らの鋭い心の目
で、汚れた私の心がすべて見通されたか
のようでした。私は畏れました。同時に自分
自身について恥じ入り、レッスンを受けさ
せてくれるよう真剣にお願いしました。

教えはすばらしく、レッスンを受けるた
びに心が満たされていきました。あるとき、
体調を崩して3日間入院したことがありま
したが、大切な伝道の時間を割いて彼ら
が見舞いに来てくれました。私は彼らの顔
を見た途端に喜びで胸が一杯になり、彼ら
が退室してから思わず涙ぐんでしまいました。
その夜から私は、必死になってモルモン経
を読みました。そしてちょうどリーハイの
示現の所まで読んだときです。急に目の前
が開けてきて、今までもやもやとしてわか
らなかったことがすべてはっきりと理解で
きるようになりました。胸が熱くなって、
涙を止めることができずでした。

人が何かを欲するとき、心底から求める
のとそうでないのでは、それを発見した
ときの喜びが異なります。特にそれがいく
ら探してもなかなか見つからないとき、焦
りの気持ちさえ覚えます。私は、空腹で死
にそうなときに与えられたひと切れのパン
をむさぼり食うかのように、ふたりの宣教
師によって紹介された神のみ言葉を心から

味わうことができたのでした。

なかなか断ち切ることのできなかつた
タバコと酒も、きっぱりとやめることがで
きました。何とすばらしい神様の祝福でしょ
う。イエス様はこの地上におられたときに
数々の奇跡を起こされましたが、今、私自
身に対してもこのような大きな奇跡を示し
てくださいました。汚れた私から悪を退け、
代わりに福音という愛をくださいました。
この福音の真実さを私は心から証したいと
思います。そして、身をもってその愛を示
してくださった監督さんをはじめ、すばら

しい兄弟姉妹たちに感謝しています。また
何よりも、深く強い信仰からにじみ出る敬
虔な態度と言葉、導きによって、私たち家
族を支えてくださった長老たちに感謝し
たいと思います。

真の福音に目覚めた私たち家族が、終
わりまで耐え忍び、主の道を正しく歩むこ
とができますよう、また、愛する兄弟姉妹の
うえに神様の大きな祝福がもたらされま
すよう、心からお祈りします。(そねはら・ひ
ろし 1947年生まれ、山形ワード部日曜学
校第二副会長)

タバナクル合唱団の歌声に 心を洗われて

仙台ステーキ部山形ワード部 曾根原 和子

そ の頃主人は酒とタバコは体に悪い
ので何とかしてやめたいと思っ
ていましたが、いくらチャレンジしても
3日ともたず、なかなかやめられずに困
っていました。日曜日となると朝からちび
りちびり飲みはじめるので、私のイライラ
は募る一方で、けんかをするこもたびた
びでした。

そんな我が家にふたりの宣教師さんが訪
ねて来てくださったのは、秋風が吹き始め
た9月も終わり頃だったと思います。主人
の両親は、教派は違いますが熱心なクリ
スチャンでしたので、キリスト教には関心
がありました。改宗するしなは別として、
お話だけ聞かせてくださいということ
で中に入らせていただきました。

そのとき主人は、「酒とタバコが体に悪い
とわかっていても、やめられなくて困
っています。何とかやめる方法はない
ですかね」と尋ねたところ、「心の底
から神を信じてお祈りする気持ちに
なれば、必ず天のお父様は助けて
くださいます」と言われ、ふた
りの宣教師さんと共に3人で、酒と
タバコをやめられるようにと熱心
に祈りました。

私はといえば、少しはキリスト教に関
心はありましたが、別に悔い改める
ほどの悪い人間ではないと思い、宣
教師さんの話も聞く必要がないと
意地を張っていました。

しかし、毎週日曜日の夕方に宣教師
さんはレッスンに連れて行かれていま
したが、不思議

なことに二度三度と回を重ねるたびに
主人がすっかり変わり、別人のよう
になっていったのです。今まであれ
ほど何回もやめようと思っても絶
対にやめられなかった酒とタバコ
をきっぱりやめて、お祈りをする
ようになっていったのです。その
とき私は初めて、人間では絶対
できないことも助けて導いてくだ
さる神様の存在を知りました。

それから、主人はクラシック音楽が
好きなので、日光長老からモル
モンタバナクル合唱団の讃美歌の
テープをお借りしたのですが、主
人がそれを聞きながらときどき
涙しているのを見ることがあり
ました。

次の日、主人が会社に行っている
間に何の気なしにそのテープを
聞いた私は、急に全身にガタガ
タと震えを感じ、熱くなって涙
があふれ出ました。あまりにも
神々しく、あまりにも霊的で、
私のどす黒く汚れた魂を洗い
清めてくれるかのようなその
賛美の聲の前に、私は、しば
らくの間声を出して



各地のたより

泣いていました。

こんな体験は生まれて初めてでした。この世に生を受けてから30数年というもの何と無駄に過ぎてきたのか、また何と自分は高慢でくだらない人間だったのか思い知らされたような気がしました。できることなら生まれ変わって、きれいになって天のお父様のところへ行きたいと心の底から思いました。

そのことを主人に話したとき、主人は涙を流して喜んでくれ、今度一緒にレッスンを受けようと言ってくれました。

それから1カ月半くらいしてから、私たちは夫婦でバプテスマ(昨年の11月24日)に導かれ、末日聖徒となりました。神を、御子を、心から愛し尊敬し、また信頼するようになりました。私たちは神に対し、隣人に対し、いつも従順で謙遜であろうと決心したのです。

私の家族の生活が、すべて変わりました。

ものの見方や考え方、価値観、夫婦として親子として、本当に変わりました。家庭の中には明るい灯がともし、笑いが戻って小さな天国のようになりました。私たちがいつどこにいても、何をしても、みたまの見守りがありますので、心にはいつも安らぎがあります。

ここまで私たちを導き救ってくださった日光長老とジェンタ長老に心から感謝いたします。

この末日聖徒イエス・キリスト教会が、神からの啓示を受けて回復された、唯一真実の教会であることを証します。真理はひとつしかありません。

私たちはこの教会に真理を見いだすことができ、神様から何より貴い祝福をいただいたと思っております。このすばらしい福音を子供たちにもしっかりと伝えていきたいと思えます。(そねはら・かずこ 1949年生まれ、山形ワード部扶助協会書記)

した。しかしながら、彼女は平然としてなおも言葉を続けました。「日曜日に遊びに行ってもいいですか? そして教会へも連れて行ってくださいね。」

それは真実でした。私の聞きまちがいで何もありませんでした。彼女は、2月の終わりから宣教師のレッスンを受け、4月の終わり(4月28日)にはもうバプテスマを受けたのです。

神様のみ言葉を聞いて、それを本当に実践することができたなんて、私にはまだ夢を見ているかのように思えます。しかしこのことを通して、神様が確かに生きておられ、絶えず私たちを導いてくださっていることを真実真心から証できます。そして、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実まことの教会であることを心から証します。

またこれからも、ひとりでも多くの人にこの福音を伝えるお手伝いがしたいと、心から願っています。(さらやま・たづこ 1954年生まれ、茨木ワード部扶助協会書記補助)



●日々の恵み●

バラード長老の「伝道」の目標を 実行して得た証

大阪北ステーキ部
茨木ワード部

更山 多津子
(写真左)

私の人生にとってこの証はとても大切な1ページとなるものです。なぜなら、教会員となって今日ほど確かな証を得たことがなかったからです。

最近になって教会の書物をよく読むようになり(以前はあまり読んでいませんでした)、今年の年間目標を知りました。それは「伝道」です。「聖徒の道」の1月号に記されたM・ラッセル・バラード長老の言葉が強く印象に残りました。

「近い将来に特定の日を定め、その日までにだれかを福音の教えを聞くことができるように備えさせるのです。……いつか教会員になるなどとは思ってもみなかった人の名前を思い起こさせてくださるので

す。」
これを読んだとき、これはまさしく神様が私に望んでおられることであると感じました。そしてすぐさま断食と祈りを始めました。

わずかに2食の断食でしたが、神様は私の祈りを聞き届けてくださいました。1月に「聖徒の道」を読んでから、その翌月には福音を聞いてくれる友人を見いだすことができましたのです。

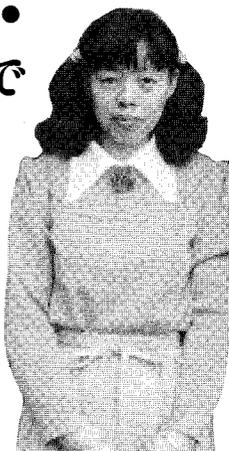
私たちはごく自然に教会の話に入り、友人は私の言葉に何ひとつ否定することもなくこう言ったのです。「私も教会に連れて行ってください」と。(えっ? 今聞いたことは本当に本当?)と一瞬自分の耳を疑いま

●日々の恵み●

系図探求で 得た祝福

釧路地方部
帯広支部

渡辺 美枝子



主のプログラムは本当にすばらしいものです。系図探求もそのひとつですが、以前に今の家の4代までの系図を調べて神殿に提出し、自分自身死者のための身代わりのバプテスマを受けておりましたのでもうこれで系図の責任が終わったとばかり思っていて安心しておりました。

しかし私の住んでいる地方部で今年系図についての様々な集会があり、ある姉妹が系図は4代で終わりではなく、その4代が終了したときから始まると証しておられました。私は彼女の証に心を打たれ、改めて

各地のたより

調べ始めました。調べていくうちに戒名でもシートを提出できることを知り、渡辺家の家系図から新たに45枚のファミリーシートを書きあげることができました。また、私は養女ですので、それとともに実父母の方の家系図も提出しようと決心し、調べることができました。

以前に系図委員の方が実父母の方の家系図は調べる責任はないけれど、調べることが可能なら調べた方がよいと言っておられました。私は今まで、調べた方がよいという言葉ではなく、責任がないという方の言葉に甘んじて何もしていなかったのです。でも何度も神殿に参入しているうちに、霊界が私たちの近くにあり、死者の霊が自分た

ちに必要な儀式を受けてくれるように望んでいと強く感じました。

私たちは決してひとりでは救われません。教義と聖約128章15節に「死にたる者の救いは必要にして、死にたる者の救われることはわれらの救いにとりて必須なることなり」とありますがこの聖句は真実です。

系図探求を通して私は、実父母へのそれまでのわだかまりが溶け、ふたりに対して心からの愛を持つことができるようになったことが私にとって大きな祝福でした。また私を育て導いてくださった今の母への感謝と愛の気持ちをさらに深めることができました。

系図は先祖について調べるのですが、

自分自身を捜すことでもあると感じます。いかにして今の自分がいるのかよく知ることができました。先祖があつてこそ今の私がいるのです。今の世の地上に生まれ、福音を知ることができ、感謝いたします。ときとして必要な資料を得ることがむずかしいこともありましたが、心から神様に求め祈ったときにその資料を得ることができました。私たちが系図探求に熱心に働くならば神様は必ず助けてくださいます。系図探求はとても楽しいものです。

伝道と系図がどちらも神様のみ業であり、人々を救いに導く大切な主のプログラムであることを心から証いたします。(わたなべ・みえこ 帯広支部扶助協会教師)

高松ワード部教会堂(高松ステークスセンター)の完成を喜ぶ一種がまかれて18年



高松ワード部監督
工藤 徳幸

1985年 3月31日完成

1985年 4月14日献堂

19 67年6月3日土曜日朝、高松に着いた連絡船からアメリカ人宣教師4人が降り立ちました。彼らはアドニー・Y・小松長老の指示により、この四国へ第一歩を踏みだしたのです。

その日、彼らは、高松を見学して回った後、今後生活の場となるアパートを探しました。彼らの日記には、「主の助けにより3時間で、8,000円ほどの新しいアパートを見つけることができた。そこは街にも近く、たくさんのきれいな家が並ぶ住宅地に位置し、狭い敷地を除けば理想と思えるものだった」と記されています。夜になって、そ

のうちのふたりは本州へ戻りました。

高松に残ったふたりは、アパートに落ち着いてから近くを戸別訪問して回り、1週間後には約20人が福音を学ぶようになりました。また、英会話には高松の中心に位置する官庁街の県総合会館が選ばれ、6月19日に第1回が開かれました。後にその場に出席したふたりの方が高松最初の教会員となったのです。7月1日にはもう1組の宣教師がやって来ました。福音が高松にもたらされて1カ月後の7月2日に初めての日曜学校が宣教師のアパートで開かれ、7人の求道者と4人の宣教師で小さなアパー

トは一杯になりました。

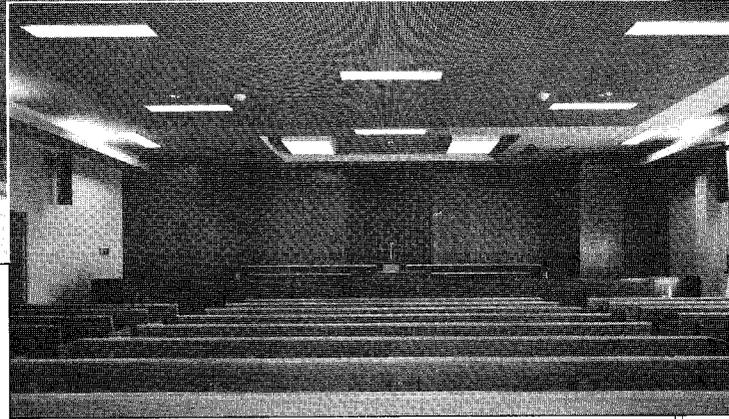
このようにして四国に福音がもたらされてから18年が過ぎ、今では高松、松山、徳島、高知の4つのワード部と坂出、丸亀、新居浜、今治、八幡浜、宇和島、南国の7つの支部があります。

高松の教会堂は5年前に1階が完成し、昨年8月よりの2期工事にて、2階に礼拝堂とカルチャーホールが完成しました。工事期間最後の2カ月間は1階の改造のため、ほかの場所ですべての集会を開かなければなりません。貸ホールを探したのですが、なかなか見つからず、それでも市民

各地のたより



〈所在地〉香川県高松市福岡町4-12-11
TEL 0878-21-1301



●礼拝堂

文化センターで何回かは開けることになりましたが、それ以外の安息日の集会所がなかなか見つかりませんでした。

しかし幸いにも教会から100メートルほどしか離れていない所に、主は聖徒らの集う場所を備えておいてくださったのです。自治会の公民館を使用させていただけることになったのでした。分級こそできませんが、兄弟、姉妹共に1週間交替で扶助協会と神権会を開いたり、日曜学校の時間は全員で系図を調べたり、ちょうど、寺小屋のように床の上にカーベットを敷いて古めかしい細長い座卓に座布団を敷き、聖餐もみんな正座をしていただきました。

カシオトーン、聖餐の道具、灯油缶などの3種の神器を持って右往左往の集会でしたが、初期の教会員や宣教師のご苦勞が少し理解できたような気がしました。このような2カ月を過ごしてから完成した礼拝堂へ入った聖徒たちの感動はひとかたならぬものであったと思います。11日の引き渡し後たくさんの兄弟、姉妹が、献堂式に向けて荷物の整理、大掃除、ワックスがけと夜遅くまで働いてくださいました。

中でも土曜日の夜は来賓の井上龍一地区代表までもが見かねて2階の窓ふきを手伝ってくださったり、初等協会の子供たちが手に手にビニール袋を持ち、草取り、ごみ拾いをしているほほえましい場面もありました。そしてとうとう土曜日の深夜、高松で最も祝福された美しい建物が完成しました。

4月14日には、徳島、丸亀、坂出の全会員、ステーキ部の役員、お世話になった建

- ◇敷地面積: 1276.91㎡
- ◇建築面積: 471.28㎡
- ◇延床面積: 942.56㎡

築会社の役員の方々と交えて、祈りの家、学問の家、断食の家、信仰の家として教会堂を主にささげることができました。

5月24、25日の2日間にわたってオープンハウスを行ないました。"ちらしを900枚、はがきを300枚ほど準備し、兄弟たちが集まって祈り、ふたりずつ、近くの家々を訪問しました。主の助けがあってほとんどの家で快く迎えてくれました。また当日は、たくさんの近所の子供が来てくれましたし、土曜の夜のパーティーには近所の方々と交えて楽しい会が持てたことを感謝しております。

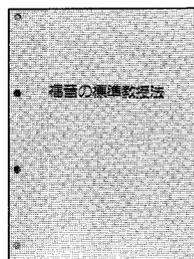
後部の座席だけでも150名がゆったり座れる、とても広い礼拝堂なので、毎週の集会には空席が目立ちます。そして、主がこれほどの集会所を与えてくださったことに対して、私たちはこの礼拝堂を人々に満たしていく責任を感じております。ニーファイの言ったように「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあることをよく知っています。(I ニーファイ 3:7) それゆえに私たちは「主が命じたもうことを行って行」ないたいと思います。(高松ワード部監督・工藤徳幸)

■ 編集室から

●心に残った記事の感想文、各地の話題や行事、「日々の恵み」コーナーの証、「職業と信仰シリーズ」、カットなどをお送りください。11月号掲載分の締切は9月6日(必着)です。投稿の際には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。

●あて先: 〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03-440-2351(代)

■ 渋谷ブックセンターから

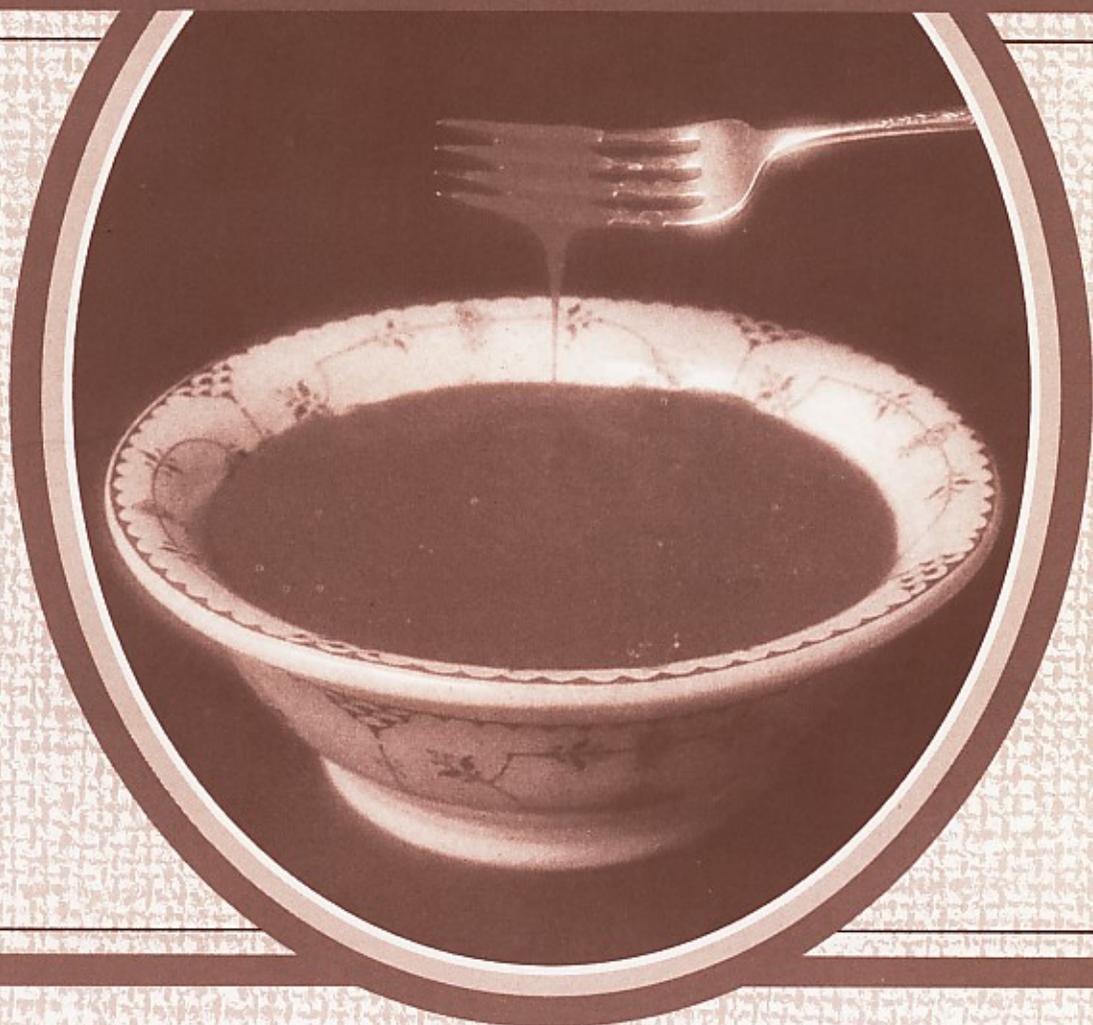


新刊
「福音の標準教授法」
A4変形 142頁 400円

従来の「家族のための求道者標準教育法」の改訂版。専任宣教師、ステーキ部宣教師、地方部宣教師、七十人そのほか伝道関係者用。この資料は今年一杯全世界の伝道部で使用された後再度検討が加えられ、来年4月に最終版(英語)完成の予定。

モルモネード

いくら教えても
愛がなければ



人は救えません
大変でも
さじを投げてはだめ

